

さくら児童クラブ指導員研修会 III

平成 26 年 11 月 27 日
松山市立さくら小学校 会議室
18:30~



児童クラブの今後について～行政のあり方～方向性を探る

経緯

1 回目は、興味、関心についてアンケートをとった。2 回目は愛媛大学白松教授に子どもの発達段階について説明していただいた。3 回目は松山市と愛媛県の職員に来ていただいて話を伺う。

現代の日本社会には活力がない。高齢者の知恵を借りる、女性の労働力の推進、子どもの潜在能力をどう伸ばすのかという政策があるが、児童クラブはこの3つが微妙に絡み合っているカテゴリーである。今後、注目されていくと思う。

愛媛県生涯学習課

西坂 淳

放課後子ども教室の担当者。おもに放課後子どもプランについて話をする。

放課後、子どもが安心して過ごせる場所として設置された。少子化、核家族化、ともなう凶悪犯罪から平成 19 年に放課後子どもプランが創設された。地域の人に参画していただいて、学校の空き教室等を利用して行う点からも児童クラブとはとても近い。

子ども教室は学校とは違う体験の場として文部科学省、児童クラブは家庭にかわる遊び場として厚生労働省の所管となっている。

保育所を利用する共働き家庭等においては、児童の小学校就学後も、その安全・安心な放課後等の居場所の確保という課題に直面する。いわゆる「小1の壁」を打破するためには、保育サービスの拡充のみならず、児童が放課後等を安全・安心に過ごすことができる居場所についても整備を進めていく必要がある。

加えて、次代を担う人材の育成の観点からは、共働き家庭等の児童に限らず、全ての児童が放課後等における多様な体験・活動を行うことができるようにすることが重要であり、全ての児童を対象として総合的な放課後対策を講じる必要がある。

このような観点から、厚生労働省及び文部科学省が連携して検討を進め、平成 26 年5

月の産業競争力会議課題別会合において、両省大臣名により、放課後児童クラブの受皿を拡大するとともに、一体型を中心とした放課後児童クラブ及び放課後子供教室の計画的な整備を目指す方針を示した。また、平成26年6月24日に閣議決定された「日本再興戦略」改訂2014において、「(略)いわゆる「小1の壁」を打破し、次代を担う人材を育成するため、厚生労働省と文部科学省が共同して「放課後子ども総合プラン」を年次策定(略)」することとなった。

総合プランは、平成27年～31年までに、全小学校に児童クラブと放課後子ども教室を設置することを目的としている。同じ小学校の敷地内で、児童クラブの子どもが希望すれば放課後子ども教室に参加でき、終了後児童クラブに帰るという構想。実際には、児童クラブは学校内、放課後子ども教室は公民館でというところが多いが、総合プランとしては、学校の施設を利用し、市町村が責任を持つという体制の明確化を図りたい。

しかし、セキュリティの問題や家庭との連携という点もありなかなかスムーズにはいかない。一人一人の状況確認や学校での様子学校外での様子等、どのように対応していくか、指導者は先生と連携して行ってほしい。

放課後子ども教室は、学校とは違う体験の機会の提供ということで、地域の方々に指導していただく。公民館と一緒に活動することになる。指導者は直接子どもとかかわる教育活動推進員とサポーターとして子どもの後ろで安全等見守りをしていただく方が必要だろう。地域の実情に合わせて展開して行ってほしい。

松山市役所子育て支援課

尾崎副主幹

子育て支援課では、神社、団地等の空きスペースに遊具を置く児童遊園地や、児童クラブ、児童館、子育て情報誌の発行等を行っている。児童福祉法6条には法令で定める基準として、おおむね10歳未満の児童を預かる場所として児童クラブがあったが、来年4月より改正される。小学校6年生までが対象となる。国は、日本再興戦略として次の担い手を生み出すものとして、また、労働力確保のためにも児童クラブの拡充を挙げている。

現在は、松山市においても、共働き世帯が51%、徐々に上がっていている。このような状況に伴い、児童クラブの入会率も上がると予想される。学年が上がるにつれ、児童クラブの入会率は減っていくと思われるが、実際どのくらいの高学年児童が入会するかは、見通しが難しい。

目指すのは、希望する児童すべて児童クラブに入会させる、大規模化しない、親の就労と健全育成のバランスを図る(18時で終わるのは短いのか、20時だと、親子の触れ合いの時間はあるのかという問題点もある)地域の力を借りる(地域住民にとっては意識がいろいろ)等。行政、保護者、指導員、学校、地域等、みんなでつくっていくこと。

そして、地域の子どもは地域で支える、誇れる地域にして行ってほしい。

討議

A:以前はさくら小学校の児童クラブは地域の借家でしていた。当時の校長先生が骨を折ってくれて現在がある。これは、誇れることだと思う。また、さくら児童クラブは、すでに、放課後子ども教室のようなこともやっている。

B:総合プランだと、学校の空き教室を利用するとなると、施設管理の面からも問題があるので、貸したくないと思っていたが、時代の動向を見て貸さないといけないのかと思った。現在はトイレも1か所だけをお願いしている。6年生まで受け入れということになると、学校のどこを貸せばいいのか。

C:149名の希望者がいる。4割が2年生だが、3年生が増えつつある。28年には180名になるのではないかと不安である。長期対策というよりは通年どうするのか。

尾崎：さくら児童クラブは現在学校内で2か所に90名ずつ分かれて行っているが、第3を考えなくてはと思う。

D:国の省令で、何人かに1人指導員がつけばいいと言われているが、地域のおばちゃんがつくのでいいと思う。地域の中で温かく育ててほしい。目の前の子どもに対して、受け入れ施設ないから受け入れないということはできない。その時のとりかえしのつかない時代である。

児童クラブ、放課後子ども教室が相互乗り入れしながらできればいい。問題はある。放課後子ども教室の子どもにはおやつがないが、児童クラブの子どもにはある。児童クラブの子どもはお金を払っているが、放課後子ども教室に通っている子は払っていない等。相互乗り入れしているところは、敵対関係はないし子どもの方は心配ないが、指導者はどうか。

西坂：同じ学校の中で児童クラブと放課後子ども教室が一緒に入っているところもあるが、なかなか一体化はできない。もともと違う形で募集している。指導員は、放課後子ども教室の方はボランティア、児童クラブの指導員は報酬をもらっている。保険の問題もある。学校で、児童クラブの子がけがをするとどちらが負担するのか等。ケースバイケースである。

D:さくら小学校の現状は、地域の人にもっとかかわってもらうこと。新しい教室ではなく、学校でできない学びをどうつくっていくか、指導員だけでは無理。

B:さくら児童クラブは珍しいと思う。今まで赴任したところは、児童クラブの子のいたずらやクラブ活動をしている子の前を横切ってけがをしたりしてたいへんだった。現状はそう。そんな中で、連携するにはどうしたらいいか。

尾崎：普段からの情報交換が必要だと思う。地域の人も保護者も会議でしか会わないという児童クラブもある。

西坂：教員をしていたので、以前は、児童クラブに顔を出して指導員にも声をかけていた。学校では知らない子どもの様子などを教えていただいていた。

B:広がっていけばいくほど、トラブルも起きる。しかし、子どもにとってはいろいろな人に会うことは大切。児童クラブの指導員と教員との情報共有は必要。

C:学校へは聞かれたことは伝えるが積極的には伝えないことにしている。保護者に学校の情報を伝えることもある。学校、地域の信用を失わないためにも、聞かれた以上のことは言わないようにしている。特別支援の子についてはコーディネーターに教えていただく。

D:話せるチャンネルは確保されているか。児童クラブは保護者の信用、次に子どもの信用が大切。学校とシステムをどう作るか。システムは運営委員会がつくって、チャンネルを共有する。マンパワーではなく運営委員会で。

E:放課後子ども教室の方にはかかわっていないので想像がつかないが、児童クラブの方に予算をつけていただいて、いろいろな体験をしたり、高校生や大学生を呼んでいい流れをつくってほしい。

尾崎：児童クラブの予算は人件費のみ。検討している。

F:松山市と相談して出していきたい。提案型の事業については予算を出す。格差がないようにしてきたが、活動するところには予算が出るようにしたい。

D:児童クラブは団体規約となっているので、行政や民間の補助金を取りに行けばいい。ハードは行政、子の健全育成や学びはどう育つかについては、地域がかかわっていく。

尾崎：児童クラブにおける格差は問題である。質の確保は必要だと思う。

D:出る杭は出たしまえばいい。そしてみんなでレベルアップしていけばいい。そのような方法をみている児童クラブもあると思う。情報が入ると変わる可能性もある。

B:組織がきちんとしている児童クラブはなかった。子どもが育つことにかかわっているのにこんなのでもいいのかと思ったこともあった。

C:他の児童クラブを知らない。地域の方に助けていただいている。指導員一人一人が特技をもっていることもあり大変助かっている。尾崎さんをお願いすることも多い。

D:組織ができると手段と目的ができる。手段が目的化する。地域の縁側としてつくっていても、児童クラブが目的となってしまう。子どもが家庭に帰るまでの場所は非常にいい場所にしてほしい。

次回第4回は、他の児童クラブはどのように運営しているか、ディスカッションする。